

飯舘村までいな復興計画

“Madei” plan for restoration in Iitate village.

○ 鈴木心也¹, 今井美里¹, 今福貴子¹, 倉本潤季¹, 平林凌太郎¹, 武藤静¹,
糸永順子², 溝口勝¹, 林直樹¹

Shinya SUZUKI, Misato IMAI, Atsuko IMAFUKU, Junki KURAMOTO,
Ryotaro HIRABAYASHI, Shizuka MUTO, Junko ITONAGA,
Masaru MIZOGUCHI, Naoki HAYASHI

1. はじめに

2011年に引き起こされた福島第一原子力発電所事故（以下、福島原発事故）により放射性物質が自然環境中に拡散した。福島県飯舘村は気象条件や地理的条件により放射性物質が飛散し、空間線量が高くなったために計画的避難区域に指定された。2012年7月、計画的避難区域が、帰宅困難区域、避難指示解除準備区域、居住制限区域に分割されたため、今まで帰村のために一枚岩として動いていた村がバラバラになりつつある。また60、70代の村民を中心として自分たちの息子の世代ではなく孫の世代が飯舘村に帰村可能であるようにする「世代飛ばし」も提案されている一方で、孫の世代が帰村するかどうかは未知数である。そこで本研究では、参加者が主体となって問題解決に取り組むワークショップとして、学生が中心となって取り組んだ。そして、実施した聞き取り調査に基づき、今後の飯舘村の復興の在り方・方向性を考察した。

2. 方法

2013年11月29-30日に飯舘村出身の20代、30代の男女3名と60代、70代の男性3名と福島県飯舘村および伊達市において自由形式で聞き取り調査を行った。得られた聞き取り調査の内容を①震災前の飯舘村を振り返る語り、②現在の飯舘村と自身を取り巻く状況に関する語り、③将来の展望に関する語りに分類することで、今後の飯舘村の復興に対する着眼点を明らかにした。

3. 結果と考察

(1) 震災前の飯舘村を振り返る語り

60、70代への聞き取り調査から、昔は農業のみで生計が立てられており、震災以前は若い人が村外で給料を得て年寄りが百姓をしていた、農業の生産性は低かった、標高が高いために農業は厳しかったとの意見が見られた。このことから農業に依存していながらも飯舘村は既に産業としての農業が空洞化しつつあったことが推測される。しかし、地域の人々が互いに助け合い、また大部分が山津見神社の氏子であったこと、若い人が祭りを企画していたことから飯舘村としてのつながりを強く必要としていたと考えられる。

¹東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agriculture and Life Science, The University of Tokyo

²東京大学大学院学際情報学府 Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

キーワード：農村計画, 復興, までい

(2) 現在の飯舘村と自身を取り巻く状況に関する語り

村民の声を聞かずに除染をしており、地元へ寄り添ったかたちになっていない、優良農地に仮置き場を作っていること等の除染への不満を挙げる村民が多かった。20代の被験者より、帰村したい祖母と帰村したくない母との意見の相違が起こっているとの回答が得られた。これは帰村するまたは帰村しない村民間でひとつの家庭内においても不和が生じていることを意味する。そして、それを解決する場がないことが飯舘村として円滑な人間関係を構築することに悪影響していると考えられる。

(3) 将来の展望に関する語り

帰村に関する村民意識と村の未来像に関する村民意識の2つに分けて考察した。前者については、60、70代は飯舘村に戻りたい意見が多かった。これは長年飯舘村で暮らしてきたことから当然である。ところが20代においても今すぐ帰りたい、避難区域が解除されたら1年以内に帰りたいとの帰村への想いが見られた。これは飯舘村に住んでいた年数では説明することができないので他の要因であると考えられる。一方で、30代では家庭を持つことを考えると帰村できないとの回答も得られた。おそらく、子どもへの安全性の配慮が密接に関係していると考えられる。実際に飯舘村は子どもと暮らせる環境ではないと思うに76.6%が○(はい)と回答しているアンケート結果もある(飯舘村放射能エコロジー研究会, 2012)。さらに子どもを抱えていると放射能に対して危険派に偏りがちである(東京大学大学院, 2012)。以上を踏まえると、帰村に対しても世代や家庭の有無によっても大きく違いが見られた。後者については、麻を産業およびバイオ燃料に利用したい、高齢者をターゲットにして観光型農業を実施したい、企業誘致を実施して雇用を生み出したいといった多様な産業を飯舘村主導で行っていきたい意見が多く存在した。土地が放射性物質に汚染されているにもかかわらず、村民の土地への愛着強さが見られた。

4. おわりに

聞き取り調査を実施したのは飯舘村民の一部であったが、世代のごとに意見のばらつきが見られ、このままでは地域としてのつながりを失いバラバラになってしまうことが危惧される。しかし、飯舘村は今まで互いに助け合って生活してきたことから、村民がある程度分散した状況においてもコミュニティの維持していく仕組みが求められている。

参考文献

- ・ 飯舘村放射能エコロジー研究会 (2012): 飯舘村民アンケート. <http://iitate-sora.net/report> (2014/3/31)
- ・ 東京大学大学院 農学生命科学研究科 農学国際専攻 (2012): ボランティアで研究はできるか?. <http://www.iaei.gu.ac.jp/mizo/lecture/noukoku-1/group-work/2012/G6.pdf> (2014/3/31)

謝辞

本研究は飯舘村の皆様のご理解とご協力を得て実施された。記して深く謝意を表す。東京大学大学院農学生命科学研究科農学国際専攻「農学国際特論Ⅰ」および東京大学ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム「ワークショップB」の取り組みとして実施された。